

ホエールウオチング事業への取組み  
—都市近郊型漁業の創出—

U S A ホエールウオチング協会  
副会長 鳴滝 丈泰

1 地域と漁業の概要

宇佐地区は高知県のほぼ中央部に位置する土佐市の海岸部にあり、土佐節発祥の地として全国的に知られている。19トン船によるカツオ一本釣やマグロ延縄、ウルメ釣等の沿岸漁業が中心で、平成8年度の漁協での水揚げは全体で419トン、2.3億円であった（図1）。近年はカツオ漁業をはじめ、ほとんどの漁業で漁獲量が低下していることに加え、魚価の低迷による経営の悪化、漁業者の高齢化と後継者不足等多くの問題を抱えており、観光漁業の導入等経営の多角化によって漁家経営の安定を図る必要に迫られている。

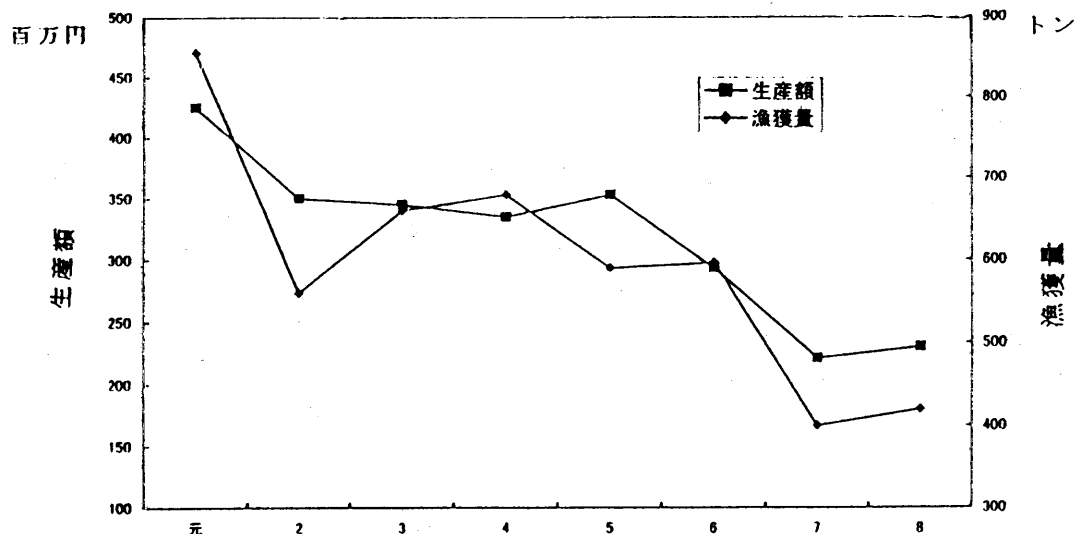


図1 宇佐漁協における漁獲量及び漁獲高の推移

2 研究グループの組織及び運営

U S A ホエールウオチング協会は、宇佐沿岸海域で実施するホエールウオチングの航行の安全と航行秩序の確立を目的に、平成8年4月1日に発足した。現在は会員5名で構成されている。事務局を宇佐漁協内に設置し、漁協が会の運営をバックアップしている。

3 研究・実践活動課題選定の動機

高知県内では平成元年に室戸市と大方町で相次いでホエールウオチング事業が開始され、急速に発展していった。沿岸漁業が不振な中で、宇佐の漁業者の間でも宇佐沖でよく見られる鯨類を対象とするホエールウオチング事業を模索する考えが出始め、平成7年度に初めて漁業者による調査が行われた。結果は良好で、ニタリクジラ、ハナゴンドウ、マイルカ等が多く見られた。特に8月以降は目視率が高く、事業化に向け自信を深めた。



事業は午前と午後に分け、出発時刻をそれぞれ9時及び13時とし、乗船時間は4時間以内、乗船料は大人4,500円、子供3,500円に設定した。また、船は1隻が10～12人乗りで、簡易トイレと座席を備えつけた。平成8年4月の事業開始当初から集客は順調で、約7カ月間に延べ125回出航して、合計963人の客にホエールウオッチングを楽しんでもらうことができた(表2)。荒天のため、浦ノ内湾クルーズに切り換えたり、引き返したこともあったが、ホエールウオッチング実施時の鯨類の目視率は全体で54%になった。特に8月下旬以降はニタリクジラの目視率が高くなった。

なお、乗客数が予想を上回ったので、8月からは船を4隻に増やして対応した。

表2 平成8年度のホエールウオッチング実施状況

月	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
出航回数	8	17	12	17	36	20	9	6	125
乗船客数	68	127	100	142	287	141	61	37	963
目視回数	2	7	3	7	19	15	6	5	64

平成9年度は船を5隻とし、4月から事業を開始した。実施状況を集計したものが表3である。8月中旬までに8年度の総乗客数を上回り、最終的には約1.5倍になった。

事業収入も8年度の約350万円に対し、9年度は約600万円と大きく伸びた。

また、9年度は7月からニタリクジラが見え始め、目視率も60%と8年度を上回った。

表3 平成9年度のホエールウオッチング実施状況

月	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
出航回数	12	23	9	27	47	23	12	0	153
乗船客数	77	194	74	353	532	148	109	0	1,487
目視回数	1	10	3	25	37	13	2	0	91

乗船客を地域別に分けると、9割近くが県外客で、特に関西や岡山県からが多かった。また、高速道が日本海まで開通した平成9年度からは鳥取、島根両県からの客の増加が顕著であった。性別では約6割を女性が占め、年齢的には30歳以下の若い世代が目立った。

なお、クジラが見えなかった場合には、客に宇佐の特産品であるカツオの生節を1本づつ持ち帰ってもらうことにしている。

## 5 波及効果

ニタリクジラは土佐湾の西部海域一帯で見られることから、ホエールウオッチングを観光メニューの一つに加える漁協や自治体が増加してきている。より多くの漁業者の漁業経営が安定するのは良いことで、今後連携をとりながら事業を発展させていく必要がある。

## 6 今後の課題

### (1) 新たな客層の開発とリピーターの確保

宇佐におけるホエールウオッチング事業は今年まで順調に客数を伸ばしてきた。来年度以

降も徐々に10隻程度まで船を増やし、年間受け入れ客数4,800人、年間売り上げ高2,000万円(1隻当たり200万円)を目標にしているが、今後もこの事業を継続して発展させていくためには、新たな客層の開発とリピーターの確保が不可欠の条件となる。そのためには、ホエールウatchingの魅力をさらにアピールするとともに、宇佐周辺での他の海洋レジャーや夕焼け市等催しとの連動や、クジラ関係の展示、VTRの上映等教育的な内容を持つ事業としての位置付けを考えていく必要がある。また、海の日記念行事として毎年実施している親子招待のようなイベントを通じて、まだ比較的少ない高知市をはじめとする県内在住者の興味を高めていく必要がある。

#### (2) ホエールウatchingのガイドラインの作成

高知県のホエールウatching事業を継続して発展させていくためには、県下統一的なルール作りを急ぐ必要がある。平成9年6月9日に設立された土佐湾ホエールウatching推進協議会を軸に、ガイドラインの作成を早急に進める必要がある。

#### (3) 情報網の充実

これまでの調査で、土佐湾のニタリクジラは湾中央部から西部にかけての沿岸海域を餌や水温などの環境条件に応じて移動していることがわかってきた。今後目視率の向上や研究を進めるためにも、地元漁船や関係団体相互の情報網の充実が重要な課題となる。

#### (4) 研究の継続

クジラの季節的移動や生態についてはまだわからないことが多く、年変動も大きいので、今後も長期にわたってデータを蓄積していくことが重要である。特に今後教育的事業としての位置付けも目指す中で、展示の充実や私達ホエールウatching実施者の知識を深めていく意味でも、県や市の協力も得て、研究体制の確立を図っていく必要がある。

#### (5) 都市近郊型漁業の創出

漁業をとりまく環境が悪化する中、土佐市では平成8年3月に「土佐市水産業振興計画」を作成した。この計画の中で、土佐市は高知市に近いという立地条件や隣接する横波地区の観光事業の展開にも呼応した「海洋性レクリエーション共存型水産業の創出」を一つの大きな柱にしている。また、この計画を受けて平成9年3月に作成された土佐市の観光漁業振興計画の中で、ホエールウatchingはその中心的役割を果たすべく組み込まれている。

新しい海洋レジャーへの関心は今後ますます高まってくることが予想される中で、観光漁業の事業はまだ大きな発展の可能性を秘めているといえる。宇佐地区における種々の海レク事業とプレジャーボートの基地としての機能、隣接する年金保養基地等との組み合わせも考えると、たとえ荒天でホエールウatching船が出航できない時にも客に満足してもらえるような、バラエティーに富んだ海洋レジャー環境を形成することができると考える。

私達はホエールウatching事業により漁業の多角的経営を目指すのみならず、訪れた人々に非日常的な素晴らしい自然体験を満喫してもらうとともに、都市に住む人々との交流を大切にしていくなかで、若者が誇りを持って住めるような、明るく活気のある宇佐の町作りのために今後も力一杯取り組んでいきたいと思う。